大学の移転統合とテニス

中嶋 山翁 雄
（国際関係論教授）

外語大は、新制大学として戦後に再発足したのだが、当時に比べると学生数は約三倍も増加し、教職員数も約三百名と単科大学としてはかなり大きな大学になってきている。私が西ヶ原キャンパスに入学した昭和三十一年（一九五六）当時は現在の一号館の一角だけが鉄筋ビルで木造の古校舎が現在の四号館の位置にあり、ただだけだったからかなり広い空間が残っていた。

しかし今日の外語大の状況は、その全体的構造や環境も含めて、あまりにも負荷があり、大学らしい雰囲気には程遠い。

従って、テニスコートも少ないし、設備もよくない。大学の移転は二のような現状からしても不可避だと思うが、幸いにして都市の移転候補地は今日望み得る最高の場所でもあるので是非納得が実現するよう願っている。

もとより、大学はキャンパスの広いことだけがすべてではない。要は、大学移転を一つの契機にして、外語人がいかに充実してゆくかにかかっている。百年前後の本学の歴史をふりかえるとき、また、国際社会の今日の広範な発展や交流を考えたとき、いまこそ外語のパラストロイカが必要ではなかろうか。二十一世紀の日本をリードする国際レベルの大学への再生をおして、いまこそ大きく脱皮すべきだと私は思う。

そのような新しい外語大の新しいキャンパスで、テニス部のOB、O生諸君と再会する日が来ることを祈っている昨今であるが、よいよ大学の移転推進組織もでき上がった。私は、その中枢の企画本部員会生の員長の重責を負うことになったので、これまで以上にコートに出る機会がなくなるであろうし、とくにテニス部長の仕務も充分世代の教育に交代した方がよいのではないかとも思っている。私の周りの師の諸先生の強い要望で引き続いだテニス部長。だと言う責任もあるのでどのようにすべきか考えているというのが率直な心境であるが、いずれにせよ、いまこそはらくはテニス部の諸君を精一杯声援してゆきたい。